

ニコラオス・ルキデリス著『それが考える』 ——ニーチェのアフォリズムをめぐる歴史哲学的探求——

木本 伸

Es handelt sich um die Rezension von Nikolaos Loukidelis: *Es denkt. Ein Kommentar zum Aphorismus 17 aus Jenseits von Gut und Böse*, 2013. In dieser Dissertation, die im Jahr 2010 bei Volker Gerhardt am Institut für Philosophie der Humboldt-Universität vorgelegt wurde, konzentriert sich der Autor aus Athen auf Problematik vom im Titel genannten Aphorismus Nietzsches. Dieser Philosoph verneint hier deutlich die Realität des grammatischen Subjektes nicht nur in der Aussage *ich denke*, sondern auch *es denkt* als deren Alternative, die von Lichtenberg u.a. vorgeschlagen wurde. Loukidelis gibt zuerst in diesem Buch die Aussicht auf Wirkungsgeschichte dieses Aphorismus vor allem in Bereichen von Philosophie, Linguistik und Psychoanalyse. Dann wird der Text Nietzsches genau philologisch geseziert. Dabei bemüht sich der Autor vor allem wissenschaftlich herauszufinden, wer von Nietzsche im Text ungenannt kritisiert *Logiker* ist. Er versucht zum Schluss diesem Text im Licht von den Gedanken *Leib* und *Willen zur Macht* neue Interpretationen zu geben.

キーワード：善悪の彼岸，主語の実体化，身体，力への意志，エス

1 はじめに

本稿はニコラオス・ルキデリス著『〈それが考える〉『善悪の彼岸』第17番のアフォリズムへの注釈』¹⁾の紹介を任とする。著者のニコラオス・ルキデリス（以下NLと略記）はギリシア出身のニーチェ研究者（以下ニーチェはNと略記）。本人の紹介によると，アテネで哲学を専攻していた学生時代，当地を訪れたドイツのN研究者フォルカー・ゲアハルト（Volker Gerhardt）の知己を得てベルリンに留学し，2010年夏にフンボルト大学ベルリンの哲学研究所²⁾で博士学位論文を執筆。本書は，この学位論文に加筆したものである。指導教授のゲアハルトは当代における歴史批判版全集に依拠した文献学的かつ哲学的N研究の代表者といえる。本書もその伝統を継いでおり，緻密な歴史的考証に支えられた哲学的考察を特徴としている。現在，著者は新カント全集の編集者としてベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーに勤務している³⁾。

NLは本書の執筆モデルとしてNの『道徳の系譜』第3論文をあげている（12）。ここでNは『ツァラトゥストラはこう言った』の一節を引用して、『道徳の系譜』第3論文はこの『ツァラトゥストラはこう言った』の言葉の解釈だと主張する⁴⁾。その解釈は彼独特の宗教心理に対する批判的解読と呼ぶべきもので，通常の解釈の概念を大きく超える。それは当然ながら現代の文献学

的解釈の手法とも異なるものであり、その意味で上記のNLの発言は不可解だが、おそらく彼は本書第2部の哲学的解釈においてNの大胆さを意識したのだろう。

本書は表題において示されている通り、『善悪の彼岸』17番のアフォリズムの解説に捧げられている。その詳細を見る前に、全5章からなる本書の構成を概観しよう。

- 1 序論
- 2 アフォリズム 17 番の重要性について
- 3 第1部：Nのいう論理学者とはだれか
- 4 第2部：アフォリズム 17 番を解釈する
- 5 今後の展望

以下、本書の内容を見ていくに先立ち、ここで主題化されるアフォリズムの全文をあげておきたい。引用に際しては白水社版全集⁵⁾を参照し、執筆者の判断で適宜変更を加えている。

論理学者たちの迷信について言うならば、私はこれらの迷信家たちが認めたがらない一つの小さな簡単な事実を、あきることなく何度でも強調するつもりだ。——それはつまり、思想というものは「それ」(es)が欲するときやってくるのであって、「私」(ich)が欲するときに来るのではない、ということだ。したがって、主語「私」(ich)が述語「考える」(denke)の条件であるというのは、事実の偽造である。それが考える (Es denkt) という言い方。しかしながら、この「それ」がああ古い有名な「私」であるというのは、穏やかに言っても、一つの仮定、一つの主張にすぎず、決して「直接的確実性」(eine unmittelbare Gewissheit)などではない。この「それが考える」だけでも、すでに行きすぎなのだ。すでに、この「それ」が事象の解釈をふくんでおり、事象自体の内容ではない。ここでは文法上の習慣にしたがって、「考えることは行為であり、あらゆる行為には活動する者が属しており、従って——」という風に推論されている。ほぼ同じ図式に従って、昔の原子論は作用する力に加えて、さらに力が宿り、そこから力が作用する物質のかたまり、つまり原子を求めた。ずっと厳密に考える頭脳の持ち主たちは、ついにこうした「土の残りかす」なしでやっていくことを学んだのだが、もしかしたら、いつの日か人々は、論理学者たちの側においても、あの小さな「それ」(これは、あの敬意に値する古い私が気化したものなのだ)なしに、やっていくことになれるだろう⁶⁾。

2 アフォリズム 17 番の問題

このアフォリズムを研究対象とする理由。それは著者によれば、この文章の「哲学史ないし精神史および体系的重要性」(13)にある。その一例として、NLはフロイトのエス概念をあげる。実際のところ、フロイトのエス概念の成立にNの思想がどれだけ関わったのかはわからない。しかしエス概念の成立をめぐる議論では、ほぼ必ずNの上記の文章が引用されてきた。たとえば、ある心理学の専門誌で「エスの系譜学」と題する特集号が組まれた際には、4本の独立した論文

で『善悪の彼岸』17番のアフォリズムが引用されていたという⁷⁾。

このNの文章はフロイト研究の圏域にとどまらず引用されることが多い。それは、ここで展開される主語概念の批判が伝統的な実体ないし真理概念の批判を意味しており、本書の後半でも示されるように後期Nの思想に理論的根拠を与えるものであるからだ。そのため現在では、この文章は「古典的テキストの地位」(21)を有していると言える。

ところが、このテキストには謎も多い。そのひとつが、ここで批判されている「論理学者」とは誰かという問題だ。本書の第1部では、この問題の文献学的解明が試みられる。従来の研究では、このテキストで批判されているのはデカルトとリヒテンベルクだと見なされてきた。それぞれの著書においてデカルトは「私が考える」(Ich denke)、リヒテンベルクは「それが考える」(Es denkt)というテーゼに哲学的根拠を与えているからだ。ところが、この問題は思わぬ迂回路を辿らざるを得ない。なぜならNの蔵書の調査から、彼が著作で過去の哲学者を批判するときは、少なからぬ場合に直接の読書にはよらず、同時代の哲学史研究によっていることが明らかにされてきたからだ⁸⁾。

例えば『楽しい知識』354番のアフォリズムでNはライブニッツを援用しつつ「意識」(Bewußtsein / Bewußtheit)の批判を行う。ところがライブニッツの著作には該当する術語はない。実はリープマンという19世紀の哲学者の著作⁹⁾でライブニッツの「意識的表象」(Apperzeption)が「意識」(Bewußtheit)へと読み替えられており、Nの蔵書ではリープマンの著作の当該箇所印がつけられているという(18f.)。つまりNはリープマンを介してライブニッツに言及していたのだ。ところが、このような場合、Nが典拠をあげることはほとんどない。

3 「私が考える」

これと同様の事態が『善悪の彼岸』17番の文章にも該当する。そこで本書は「私は考える」(Ich denke)および「それは考える」(Es denkt)への批判においてNが想定する「論理学者」の素性を明らかにしていく。まず「私は考える」の批判においてNが意識していたのはタイヒミュラー¹⁰⁾であることが確実視される(26ff, 39ff.)。タイヒミュラーはその著作において「私をあらゆる行為の作用者である実在として構想する」(41)。これはNの批判の内容と正確に重なる。しかもNはタイヒミュラーの当該箇所を抜き書きしている。

さらにNLによれば、ドロスバッハ¹¹⁾もNの批判の対象として想定されている可能性が高い。その著作で示される「思考の原因としての私」(Ich als Ursache des Denkens)という定式は、17番の文章の「主語〈私〉が述語〈考える〉の条件である」(das Subjekt „ich“ ist die Bedingung des Prädikats „denke.“)と、ほぼ内容的に一致している(43)。しかもNは遺稿中でタイヒミュラーに2度も言及している(41)。この他にもドロスバッハが著作中で好意的に言及するシャルシュミット¹²⁾、さらにはヴィーデマン¹³⁾もNの念頭にあった可能性があるとしてNLは指摘する。著者は断定的な口調を避けているが、Nの蔵書中にヴィーデマンの著作が確認されている以上、その「〈考える〉という述語の条件である私」([mit] dem Ich, der Bedingung des Prädikats „denke“) ¹⁴⁾という表現は17番の文章の典拠とみなすことができるだろう(46)。

このアフォリズムで「論理学者」として想定されているのは以上の著述家たちにとどまらない。

NLは文献上の根拠を示しながら、さらに19世紀の著述家たちの名前をあげていく(46ff.)。だが、この作業に最終的な決着をつけることは難しいだろう。なぜなら、ここで批判される私という主語概念は19世紀の多くの哲学者たちによって支持されていたからだ。その意味では、Nは特定の著述家を念頭に置きながらも同時代の思想的潮流を批判していたとも言えるだろう。

4 「それが考える」

デカルトに由来する「私が考える」という真理のテーゼ。ここでは文法上の「私」が実体化されている。これに代わるものとして「それが考える」というテーゼを立てたのはリヒテンベルクである。彼はカントの『純粹理性批判』の研究を通じて(53ff.) 次のような結論に至る。「〈稲妻が光る〉(es blitzt) というのと同じように、〈それが考える〉と言う方がよいだろう。コギトを〈私が考える〉と訳してしまうのは行き過ぎである。」(35)

Nの同時代の哲学者たちは、このリヒテンベルクの思想を受け継いだ。その著述を通じてNが「それが考える」という定式を受容したことをNLは論証する。ところで、なぜ17番の文章の後半でNは「それが考える」という定式を批判するのか。「私が考える」に比べれば、「それが考える」はまだしも妥当な表現に見える。Nが両者を等しく批判するのは、どちらも「主語概念を手放せない言語習慣によって要請されたもの」(19)だからだ。このようにNLは「私が考える」と「それが考える」に対するNの立場を文法的主語の実体化批判という地平で捉えている。

著者によれば、「それが考える」という思想の批判においてNが想定している可能性があるのは、ランゲ、シュピール、ヴィーデマン、タイヒミュラーである。まず『善悪の彼岸』の成立時期にNはランゲの著作に取り組んでいた。そこではリヒテンベルクの「それが考える」が肯定的に引用されている。ランゲによれば「私」という概念はまったく仮のものにすぎず、「私を仮定し要請するのは、実際的な要求である」¹⁵⁾。こうした記述からランゲが「論理学者たち」の一人にふくまれている可能性は高い(47f.)。

シュピールはデカルトを受容しつつ「直接的確実性を拾い集めること」¹⁶⁾を哲学の課題とする。それは意識の直接性の重視につながる。Nは遺稿(1885年, 40[24])において、このシュピールの思想を「それが考えられる」(es wird gedacht)という定式で要約している¹⁷⁾。この定式と「それが考える」では文法上の態が異なる。だが、そもそも「考える」(denken)が捉えがたいものであるならば、「それが考える」も「それが考えられる」も大した違いはないとNLは判断している。この遺稿の記述から、シュピールも「論理学者たち」にふくまれると本書は判断する(49f.)。

次に検討されるのはヴィーデマンである。その著作の次の箇所にもNは折り返しを付けているという。「これらの考える〈私〉や〈彼〉や〈それ〉によって表象されるのは諸思想の超越論的主観に他ならない」¹⁸⁾。この表現は「それが考える」という定式のカント的形式であり、この哲学的残滓としての「それ」にNは注目したのだろう。さらに、この折り返しを付いた頁にはアフォリズム17番の後半と同内容の文章が書き込まれているという(51)。

最後に言及されるのはタイヒミュラーである。彼はロツツェ¹⁹⁾の存在理解を次のように要約する。「もはや〈私が考える〉〈私が欲する〉(略)などと言うことは許されない。例えば、ただ〈そ

れが考えることを考える）（es denkt sich das Denken）〈それが欲することを欲する〉（es will sich das Wollen）（略）などと言うべきである。私たちが習慣的に文の主語として使用している〈私〉は余計で意味のないものとなるのだろうか。」^{20）}この「それが考える」に類似した奇妙な定式に、読者としてNが注目した可能性は否定できない。ただし17番の文章で批判される「論理学者」にタイヒミュラー＝ロツツェが想定されているかどうかは確定できないと、NLは結論している（51ff.）。

5 N 思想の哲学史的研究とその限界

『善悪の彼岸』17番の文章でNがデカルトやカントを意識していることは確実である。ただ、それは19世紀の哲学者たちの著作という迂路をへていることが明らかにされた。ここまでのNLの文献学的論証は大変な力技という他ない。このようにNのテキストを哲学史の文脈に置き直す作業の意義をNLは次のように4点にまとめている（15-16）。

- 1 Nのテキストのより良い理解に資する。
- 2 従来のまちがった解釈を明らかにする。
- 3 Nが密かに行った哲学的対話を明らかにする。
- 4 哲学史の文脈における歴史的客観的なNの評価を可能にする。

Nは過去の哲学者を批判しつつも、その成果によっている。こうした思索の現場を知るためには、テキストが生み出された現場を再構成する作業が有効だろう。ただし、このような作業には「原理的限界」（eine prinzipielle Begrenzung）（16）がある。カンピオーニらの労作が示すようにNは古典的哲学者（デカルトやカント）の著作をみずから学ぶことなく、多くの場合、その知識を19世紀の哲学史研究から得ている^{21）}。ところが彼は著作において、これらの典拠を明示しない。しかも、彼のテキストは複数の典拠から得られたアイデアの絡み合いの中から織り出されていく（87f.）。どれほどNの蔵書や遺稿を整理しても、このような歴史的研究に最終的な決着をつけることは難しいだろう。本書の著者が抑制的な筆致で断定を避けるのは、以上の理由による。

また、このような研究には別の意味の問題もある。これまで歴史批判的全集の整備により、Nに限らず重要な哲学者たちの文献学的研究が精緻に進められてきた。本書もそのような研究動向に裨差すものと言えるだろう。だが、あまりに専門化が進むことで哲学者のテキストから起爆力が失われ、哲学研究が好事家の趣味に墮する可能性はないだろうか。おそらく、これは人文系の諸分野で起きている問題であり、N研究も例外ではないだろう。このような問題意識は本書の著者も共有しており、本書後半のN解釈の試みは現状に対する著者の回答として受け取ることができるだろう。

6 『善悪の彼岸』における17番の文章

本書の第2部は「アフォリズム17番の解釈」（第4章の表題）を課題とする。まず『善悪の彼岸』において17番の文章が占める位置が確認され、次に「身体」および「力への意志」という後期思想との関係が検討される。

Nのアフォリズムは独立した文章としても読むことができる。だが同時に著作中の他のアフォリズムとも、ゆるやかにつながっている。『善悪の彼岸』第1章は「哲学者たちの偏見について」と題されており、ここに主語概念の実体化を批判する17番が置かれたことは理解しやすい。また直前の16番では17番と同様にデカルト批判が意識されており²²⁾、12番では主語概念の実体化から帰結する「魂の原子論」(Seelen-Atomistik)が批判されている。この「魂の原子論」とはNによれば靈魂の不滅を信じるキリスト教の基本思想である。その意味で17番にはキリスト教批判が含意されているという見方は可能だろう。ここからキリスト教とその影響下にある文化を批判する199, 201, 202, 257, 258番も17番の理論的考察から派生するものと考えられるだろう(65ff.)。

NLによれば17番の考察において重大な意義を有するのは『道德の系譜学』第1論文13番の文章²³⁾である。ここでNは「行為がすべてだ」(Das Thun ist Alles)と主張する。これに対して、あらゆる「作用」(Wirken)の背後に「作用者」(Wirkendes)を想定する弱者の思想をNは批判する。それは作用そのものを受け入れずに、「力が動かし、力が惹起する」(die Kraft bewegt, die Kraft verursacht)と考える自然科学者も同様である。彼らは等しく「言語の誘惑のもとに」(unter der Verführung der Sprache)ある。この弱者の否定からNは強者を打ち立て称揚していく。この強者には「行為がすべて」である。だが、ここには強者という存在者が自体化されていく危険性がある。それは「魂の原子論」の一種に他ならない。このときNはみずから批判の対象に絡み取られていくことになる(69f.)。このようにNLの叙述がNの思想からも批判的距離を保っていることは評価されてよいだろう。

『この人を見よ』におけるNの解説によれば、『善悪の彼岸』という著作の使命は「従来の価値の価値転換」(die Umwerthung der bisherigen Werthe)にあり、ここでは「近代性の批判」(Kritik der Modernität)²⁴⁾が遂行される。この否定的使命の背景には、それを支える肯定的な思想がある。これをNLは『ツァラトゥストラ』の章句²⁵⁾によりつつ「～からの自由は～への自由なしには不十分である」(24)と表現する。それでは17番の文章の背景には、どのような肯定的思想が隠れているのだろうか。それは「君の身体とその偉大な理性」(dein Leib und seine grosse Vernunft)²⁶⁾に他ならない。ここから本書の最終章はN後期思想における17番の文章の考察へとすすむ。

7 「身体」

17番の文章で批判される主語概念の実体化。それは魂の不滅を教義とするキリスト教の思想でもあった。この「数世紀にわたりヨーロッパ人の思想と感覚の世界を支配してきた魂概念(Seelenbegriff)の代わりに、Nにおいては身体が存在感を持って登場する」(72)。後期Nにとっ

て身体概念は非常に重要である。あらゆる文化現象をめぐる議論において、彼は身体を持ち出す（72）。たとえば従来の哲学は「身体の解釈のひとつにすぎず、しかも身体の誤解」（nur eine Auslegung des Leibes und ein Missverständniss des Leibes）（『愉しい知識』序文2）²⁷⁾に他ならない。またキリスト教道徳も同様に身体を「罪の源」（Quelle der Sünde）（71）と見なしてきた。この「身体を軽蔑したキリスト教」とは対照的に、ギリシア人は身体と生理学を重視したとNは主張する（『偶像の黄昏』『ある反時代的人間の逍遥』47）²⁸⁾。

それでは身体とは何なのか。Nは1880年代に生理学の文献に親しんだことが知られている（73, Anm.149）。そこから彼は身体を思想に着想する。だがNの身体概念は狭義の生理学の範囲にとどまらない。それはNLによれば「私たちが規定する有機的過程の総体」（der Inbegriff der uns bestimmenden organischen Prozesse）（76）であり、「私たちそのものである包括的現象」（das umgreifende Geschehen, das wir selbst sind）（76）と呼ぶべきものである。この全体的概念としての身体は決して別の概念で捉えることはできない。それは他の一切の条件をなしており、「私たちの感情と思想の根底には身体的過程がある」（75）とされる。

以上の意味で「あらゆる思想は初めは多義的で不安定であり、それ自体はいくつもの解釈や恣意的な固定化へのきっかけにすぎない」（遺稿1884年、26 [92]）²⁹⁾。つまり17番の文章で批判される主語概念の実体化は無限定な身体「恣意的な固定化」に他ならないのである。ここには（後期思想に限定されるNLの論述の範囲をこえることにはなるが）初期の論文「道徳外の意味における真理と虚偽」から一貫したNの概念批判の系譜が認められるだろう。

8 「力への意志」

「私が考える」あるいは「それが考える」というテーゼ。こうした主語概念の実体化は虚構とされる。ところがNはこれらの虚構を単純に否定しない。なぜなら『善悪の彼岸』4番の文章で主張されるように、「ひどくまちがった判断さえも私たちにあって絶対に不可欠な判断だ」（dass die falschesten Urtheile [...] uns die unentbehrlichsten sind）³⁰⁾ということがありうるからだ。つまり「私が考える」というテーゼの真理性は批判されても、それは価値としては有意味（wertvoll）とされるのだ（61）。ここには真理も虚偽も「力への意志」（die Willen zur Macht）の作用と見なす後期の重要思想が姿を現している。

この力への意志という哲学的教説については、現在もミュラー＝ラウターによる次の定義が有効とされている（82）³¹⁾。

- 1 あらゆる現象（自然、社会、個人）は力への意志の多様性によって構成される。
- 2 力への意志はたえざる相互関係にある。この相互関係の基本的性格は闘争である。
- 3 力への意志は一定の形成物をなすが、それはたえず新たに形成するものであるため、この形成物は一時的性質（temporäre Natur）にすぎない。
- 4 力への意志の形成物は原子・細胞・魂・社会など様々な視点から観察される。
- 5 力への意志（die Willen zur Macht）は複数形で表記されるべきものであり、単数形の力への意志（der Wille zur Macht）は以上の総称として使用される。

上記の定義3を借用すれば、主語概念（私、それ）も力への意志の「一定の形成物」だが、その「一時的性質」が忘却されることで実体化されたものといえるだろう。以上のように後期思想において「考えること」の内実は「力への意志の相互作用」（ein Zusammenspiel von Willen zur Macht）（82）へと還元されていく。

力への意志の思想によれば絶対的な真理などは存在せず、ただ「それぞれの遠近法による真理だけ」（nur perspektivische Wahrheit）（85）が存在する。この立場では、あらゆる思想や信条は理論的に等価とされる。ところが周知のようにNの後期テキストでは「強さの視点から構成される見方」（85）が優先されていく。

この価値論における差別は身体の本性によって根拠付けられる。そもそもNにとって身体とは生命のたえざる成長の場である。この身体概念を手がかりに、彼は「有機体の諸部分の闘争」（der Kampf der Theile im Organismus）³²⁾という生理的人間像を打ち立てる。これはたえざる闘争や自己拡張という力への意志の特徴と一致している。それはまた「自己を超えて創造すること」（Über uns hinaus schaffen）³³⁾を本質とする超人の思想へも通じているだろう。こうして生の本性を根拠として強さが賛美されていく。その一例として『善悪の彼岸』259番から抜粋しよう。

生そのものは本質的に他者や弱者をわが物とし、傷付け、制圧することである。（…）搾取は（…）有機体の根本機能として生命力の本質に属する。（Leben selbst ist wesentlich Aneignung, Verletzung, Überwältigung des Fremden und Schwächeren. （…） Die „Ausbeutung“ gehört （…） in's Wesen des Lebendigen, als organische Grundfunktion）³⁴⁾

9 おわりに

Nによればヨーロッパの哲学的伝統やキリスト教道徳は病気とされる。それらは身体の本来的なあり方（＝健康）に背いているからだ。この病気の類型に本書で主題化された主語概念の実体化もふくまれることになる³⁵⁾。この事態をNLは次のように要約する。

伝統的な道徳は律法の一般化により、しばしば個人の潜在的可能性を抑圧し、あまりにも窮屈な束縛（Korsett）へと強いる傾向がある。このような道徳にふさわしいのは自己の身体性の声を排除する「私」（Ich）である。特に『ツァラトゥストラはこう言った』第4部、『善悪の彼岸』17番のアフォリズム、『道徳の系譜学』第1論文13節において、Nはこのような「私」に打撃を加えようと試みている。（80）

人間を「私」という束縛から解放する。これがNのプログラムだと言えるだろう。この解放の根拠となるのが身体や力への意志の思想だった³⁶⁾。ところが前節で一瞥したように、力の思想には強者の賛美という歪みがある。これは、どう理解すればよいのだろうか。

まずNLは力への意志を「世界の一体的な観察に達しようとする試み」（91）として評価する。たしかに世界の「力動性」（Dynamismus）（91）を記述する方法として、力への意志という概念装置は有効だろう。だが強者の賛美は恣意的という非難を免れない。なぜならNLも指摘するよ

うに、ここには「Nの個人的嗜好」(der individuelle Geschmack Nietzsches) (90) が働いており、彼のいかなるテキストにおいても十分に根拠付けられてはいないからだ。これは「世界のあらゆる現象を唯一の原理に還元する」(91) ことで生じた「単純化」(simplifizierend) と呼ぶしかない。

この力の思想の限界は「愛という現象」(91) の考察において顕著となる。奪い合うことを本質とする力の概念では、親子や友人のような相互の関係 (Partnerschaft) (91) を汲みつくせないことは当然だろう。このような N 思想の可能性と限界の認識には、NL の見識の高さが示されている。後期 N のテキストは挑発的な卓見に満ちつつも、一部で以上のような袋小路に陥っている。この事実を直視しつつ、そこにいたる思想的経路の必然性を認識することが今後の N 研究には求められるだろう。

注

- 1) Nikolaos Loukidelis: *“Es denkt” Ein Kommentar zum Aphorismus 17 aus Jenseits von Gut und Böse*. Würzburg 2013. 以下、同書からの引用に際しては括弧内に頁数をあげる。
- 2) フンボルト大学ベルリンの哲学研究所の HP を参照のこと。最終閲覧日 2015 年 11 月 17 日。
<https://www.philosophie.hu-berlin.de/de>
- 3) ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーの HP を参照のこと。最終閲覧日 2015 年 11 月 17 日。
<http://www.bbaw.de/die-akademie/mitarbeiter/loukidelis>
- 4) 『道徳の系譜』第 3 論文は「禁欲主義的理想は何を意味するのか」と題されている。この論文の巻頭に、N は『ツァラトゥストラはこう言った』第 1 部の「知恵は女性である。女性はつねに戦士だけを愛する」(「読むことと書くこと」という言葉を掲げ、この第 3 論文全体をこの一節の注釈としている(『道徳の系譜』序文 8)。Friedrich Nietzsche: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden*. Hg.v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari. Berlin/New York 1988. Bd.5, S.255f, 339ff.
- 5) ニーチェ (吉村博次訳): ニーチェ全集, 第 II 期第 2 卷 (白水社) 1983, 39 頁。
- 6) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.5, S.30f.
- 7) ここで言及されている 4 本の論文とは次のものである。Stefan Goldmann: Das zusammengefallene Kartenhaus. Zu Bernd Nitzschkes Aufsatz über die Herkunft des “Es”. In: *Psyche*. Sonderheft: *Zur Genealogie des “Es”*. Stuttgart 1985. Bd.39, S.101-124; Joachim Ph. Kerz: Das wiedergefundene “Es”. Zu Bernd Nitzschkes Aufsatz über die Herkunft des “Es”. In: *Psyche*, a.a.O. S.125-143; Joachim Küchenhoff: Groß Es oder klein es? Anmerkungen zu dem Artikel von Bernd Nitzschke über die Herkunft des “Es”. In: *Psyche*, a.a.O. S.144-149; Herbert Will: Freud, Groddeck und die Geschichte des “Es”. In: *Psyche*, a.a.O. S.150-169. これらの論文は表題からも看取されるように次の先行研究に触発されたものである。ただし、この先行研究では 17 番の文章は言及されていない。それにもかかわらず、これに応答した上記の 4 論文が 17 番を引用しているところが興味深い。Bernd Nitzschke: Zur Herkunft des “Es”. Freud, Groddeck, Nietzsche, Schopenhauer und E.v.Hartmann. In: *Psyche*. Stuttgart 1983. Bd.37, S.769-804.
- 8) Vgl. Campioni u.a.: *Nietzsches persönliche Bibliothek*. Berlin/New York 2003.
- 9) Otto Liebmann: *Zur Analyse der Wirklichkeit. Eine Erörterung der Grundprobleme der Philosophie*. Straßburg 1880. S.212f.
- 10) Gustav Teichmüller: *Die wirkliche und scheinbare Welt. Neue Grundlegung der Metaphysik*. Breslau 1882.
- 11) Maximilian Drossbach: *Über die scheinbaren und die wirklichen Ursachen des Geschehens in der Welt*. Halle 1884.
- 12) Carl Schaarschmidt: Widerlegung des subjectiven Idealismus. In: *Philosophische Monatshefte*. Heiderberg

1878. Bd.14, S.385-403.
- 13) Paul Heinrich Widemann: *Erkennen und Sein. Lösung des Problems des Idealen und Realen, zugleich eine Erörterung des richtigen Ausgangspunktes und der Principien der Philosophie*. Karlsruhe / Leipzig 1885.
- 14) Paul Heinrich Widemann, a.a.O. S.5.
- 15) Friedrich Albert Lange: *Geschichte des Materialismus und Kritik seiner Bedeutung in der Gegenwart. Zweites Buch. Geschichte des Materialismus seit Kant*. Iserlohn 1866. S.229.
- 16) African Spir: *Denken und Wirklichkeit. Versuch einer Erneuerung der kritischen Philosophie. Erster Band. Das Unbedingte*. Leipzig 1873. S.26
- 17) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.11, S.640.
- 18) Paul Heinrich Widemann, a.a.O. S.195.
- 19) Hermann Lotze: *Metaphysik. Drei Bücher der Ontologie, Kosmologie und Psychologie*. Leipzig 1879.
- 20) Gustav Teichmüller, a.a.O. S.79.
- 21) Vgl. Campioni u.a., a.a.O.
- 22) Nは次のデカルト論を読んでおり、しかも、そこには16番の文章と類似した表現が認められるという。Vgl. Anm.118 (59) und auch Kuno Fischer: *Geschichte der neuern Philosophie. Erster Theil. Allgemeine Einleitung. René Descartes*. Mannheim 1865. S.308f.
- 23) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.5, S.278ff.
- 24) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.6, S.350f.
- 25) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.4, S.81f.
- 26) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.4, S.39.
- 27) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.3, S.348
- 28) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.6, S.149
- 29) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.11, S.174.
- 30) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.5, S.18.
- 31) Wolfgang Müller-Lauter: *Nietzsche. Seine Philosophie der Gegensätze und die Gegensätze seiner Philosophie*. Berlin/New York 1971.
- 32) これはNが決定的な影響を受けた生理学の著作の表題でもある。Vgl. Anm.149 (73) und auch Wilhelm Roux: *Der Kampf der Theile im Organismus. Ein Beitrag zur Vervollständigung der mechanischen Zweckmässigkeitslehre*. Leipzig 1881.
- 33) Vgl. Anm.161 (77)
- 34) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.5, S.207f.
- 35) Nにとって病気とは後期のキリスト教およびプラトン主義への批判のみならず、初期著作のロマン主義的傾向に対する自己批判においても鍵となる概念だった。その意味で前者への批判には自己克服という要素が隠されている。ここに後期思想において強者という病気を克服した人間理念が過度に賛美されていく一因を認めることができるだろう。『人間的な、あまりに人間的なⅡ』序文4を参照のこと。「病気とは私たちが自己の使命への権利を疑おうとするとき、私たちがどこかで楽をしようとし始めるときに、つねに与えられる回答である」(Krankheit ist jedes Mal die Antwort, wenn wir an unsrem Rechte auf unsre Aufgabe zweifeln wollen, – wenn wir anfangen, es uns irgendworin leichter zu machen.) Friedrich Nietzsche, a.a.O. Bd.2, S.373f.
- 36) これはN思想の基本的傾向と言えるだろう。次の引用を参照のこと(88)。「Nの思索のすべてを規定し際立たせるのは、形式的にいえば、大いなる人間性とより高い文化への意志と呼べるだろう。」(Was Nietzsches ganzes Denken bestimmt und hervortreibt, kann in einer Formel als der Wille zum großen Menschentum und zur höheren Kultur bezeichnet werden.) Karl Ulmer: *Nietzsche. Einheit und Sinn seines Werkes*. Bern/München. 1962. S.12.